青葉の翳り

阿川弘之

青葉の翳り

川弘之

●講談社版

青葉の翳り

昭和三十六年一月三十日　第一刷發行
二九〇圓

著者　阿川弘之

發行者　東京都文京區音羽町三ノ一九　野間省一

印刷所　豐國印刷株式會社
（藤澤製本）

發行所　東京都文京區音羽町三ノ一九　株式會社講談社
振替東京三九三〇
電話大塚（九四一）大代表三二一一

© 阿川弘之　一九六一

落丁本・亂丁本はお取りかへいたします。

目次

青葉の翳り　三
花のねむり　九五
亭主素描　一二九
友をえらばば　一三五
順ちやんさと秋ちやんさ　一五九
クレヨンの繪　一八一

裝幀　栃折久美子

題字　直木久蓉

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

青葉の翳り

一

山の青葉がゆつくりと車窓を過ぎて行く。牧野と反對側の窓ぎはの席に、男女の若い學生が二人向き合つて、其の夏青葉の山の景色が移るのを眺めてゐる。

卵色のポロシャツの下に、校名の見える大型のバックルを締めた男の學生は、黑ズボンの膝の上に若々しいがつしりした手で頰杖を突いて、ぢつと窓外の山を眺めてゐる。

連れの女子學生の方は、こまかな花模樣の洋服が、一と晩の蒸し暑かつた汽車旅ですつかり汗ばんで、それのぴつちり貼りついた肉づきのいい背中だけを彼の方に向けてゐる。

娘の背中の剝き出しになつた部分は、新しいバスケット・ボールの革のやうにしなやかで、よく焦げて、健康さうだ。

濃い一面の綠に覆はれた山峽を、規則正しく苦しさうな音を立て、蒸氣を吐き煙を突き上げ〳〵、機關車は大きくカーヴを廻つて喘ぎながら登つてゐる。

山裾の青葉が車窓に迫つて來ると、客車の中がはつきり綠色にかげつて、不意にミンミン蟬の啼き聲が入つて來た。

六人の定員いつぱいに乘つてゐた寢臺車の一と區劃の中の客が、けさから途中驛で一人づつ減つて、今は三人だけになつてゐる。

女の子は銀色の腕時計の針をちよつと見て、それを向ひの男の學生にも見せるやうな仕草をした。

「四十五分、あと」

男の學生は默つてうなづいて、相變らず窓外の山を眺めてゐる。

やはり自分と同じ驛で下りるなと、牧野は思ふ。

二人の若者は、明らかに夏の歸省の風俗であつたが、昨晩東京驛を離れた時から暫く、知り合ひなのか知り合ひでないのか分らなかつたやうな、それほど互ひに無口で、牧野は言葉を交さないままで觀てゐたが、ただ同じ鄕里へ歸る淺い道づれのやうにも見え、口數がひどく少いのは何か其の逆のやうでもあり、分らなかつた。

あと四十五分だと娘がぽつんとそれだけ言つたのは、「もう四十五分でお別れ」と言つてゐるかのやうにも、彼には思へる。

いづれにしても、しかし、確かにもうすぐだ。

此の峠を登り切ると、列車は左手にあらはれる急流に沿つて、制動をかける音とブレーキの燒ける匂ひとを撒きちらしながら、突然せはしげな下りにかかる。山が右になり、左になり、黑牛のやうな鈍重さで反對側から登つて來る上りの貨物列車とまたたく間にすれちがひ、トン

ネルを抜け、短い橋を渡り、川幅は次第に廣くなり始め、やがて急勾配の線路が川と並んで一緒に平野に入ると、間もなく向うにキラキラ光る瀬戸内海の海が見えて來る。

網を干した漁師の家があり、葡萄棚があり、紡績工場があり、ダルマ燒酎の看板が稻田の中に立つてゐる。

それは、昔からいつも正確に其の順序であらはれて來る歸省の點景で、もしさう言つていいなら、やはり今でもなつかしい風景として、牧野の眼の底には其のやうに殘つてゐる。

しかし——と彼は思ふ。

列車はやうやく山峽をほぼ登りつくして、小さな驛の構内が近づいたらしく、青葉が車窓から少し遠ざかつて、腹にこたへるやうな蒸氣機關車の汽笛が鳴つた。

しかし——

ほんたうはきつとさうではないのだ。故郷の町が近づいたことを告げる點景風物は、實際にはもうそんな風にはあらはれて來ないにちがひない。

古い紡績工場のとなりには近代的な化學工場が建ち、葡萄棚は無くなり、燒酎の赤い看板はスクーターの看板に取つて代られ、海には干拓地が伸びて、自然の風物も人工の點景も、いつからといふことなしに、いつか容を變へてしまつてゐる。

牧野が眼底に順序正しく燒きつけてゐる風景は、實は昔ある時の、そして又別の時の、歸省の日の印象の合成された遠い不正確な繪に過ぎないだらう。

牧野の氣持の中にふと、自然に彼の並びの席の大學生のことが泛んで來た。

さりげなく牧野は窓の方を見た。

やはり大學生は、どこか自分に似てゐると彼は思ふ。それは、同じ風土の中で育つた、脈絡の中にそれほど遠くない血の流れてゐる者の相似である。

たとへば此の地方の住民の容貌の、一つの典型でもあり缺點でもある少し重つたるい瞼の感じや、横から見た鼻と上唇との間の線のふくらみ、その長さなど、謂はば蒙古系の顏の中の日本系の顏の、其の又中の瀨戸内海の此の地方系の容貌の特徴なのだ。

それは當然、學生の、洗濯物のたくさん詰つてゐさうな旅行鞄といつしよになつて、彼に二十年前の自分の歸省姿を思ひ出させた。

そして、容貌の相似は牧野は前の晩から氣づいてゐたことではあつたが、かうして夏の午さがりの陽の下で見ると、それらの特徴が、油氣の無い頭髪や、艶のある緊つた額と共に、大學生の上ではすべて若さのゆゑにピンと張つてゐるのに對し、牧野では、どう贔屓目に考へても、形を支へ張りつめてゐたものがもうゆるみ始め、失はれ始めてゐる、それがちがつてゐるのであつた。

無口な若者は、頰杖を突いて何を考へてゐるのか？

父母弟妹のことか、夏休みの戀の夢、眼前の健康さうな娘のことか、それとも傾斜のはげしい政治的な情念にひたつてゐるのだらうか？

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

いづれにせよ、若者の眼はもろ〳〵の昔のことなどを泛べてはゐさうもなかつた。牧野はふだん多くの若い學生を見馴れてゐるにもかかはらず、一種のしたしみと、一種反撥心の混じた羨望とをもつて、二十年の過去を回想することの不可能な、二十年の昔は存在しないに等しい此の若者の、心の中やそのエネルギーを空想した。

此の若者のとなりに、姿の似た自分を對等の若さまで蘇らせて坐らせてみるためには、彼に二十年の歳月を捲き戻すことが必要であり、そしてこれは、はつきり出來ない相談事であつた。

列車は下り勾配にかかつたらしい。

次第に速度が速くなり、レールの繼ぎ目を渡る音が早くなつて來た。

牧野は、講義の時にいつも提げて行くポートフォリオの中から、煙草をさがして、煙草の箱といつしよに、二つ折りにした封筒を取り出した。

その茶色の長封筒の中には、「改葬許可申請書」と、彼の今度の旅の目的に關係のある一、二の證書類と、それから小學校の同級會名簿とが入つてゐる。

父母同胞の一人もゐなくなつた鄕里へ歸ることを、やはり歸省と呼ぶかどうか分らないが、牧野は五年ぶりの今度の歸省が、多分自分の最後の歸省旅行になるだらうと思つてゐるのであつた。

市内の北寺町には、彼の父母の骨を埋めた場所がある。その墓を毀つて東京へ移し、同時

に、事務的な煩雑さを伴ふに過ぎない郷里の本籍を東京へ移轉してしまふこと。

戸籍上の住所と兩親の假の墓とだけで故郷とつながつてゐても仕方があるまいといふ考へが、かねてから彼にはあつた。寺から時々年忌の通知が屆くのも、何か催促されてゐるやうで、佛への信仰心の無い彼には煩はしいことであつた。

今度その手續きが濟んでしまへば、もう偶發的な目的以外に、此のあと此の町を訪れることはなくなるだらう。

同級會の幹事は、牧野の出した便りを見て、それではと、夏のクラス會の日取りを急に彼の旅行日程に合せ、ガリ版刷りの名簿を送つて來てくれたのである。

牧野は煙草の封を切つて、新しく乾いた一本に火を點け、封筒から名簿を拔き出して眺めてみた。

名前から、子供の時の呼び名や綽名がいくつも反射的によみがへつて來る。そしてそれのよみがへる人は、顏もすぐ眼に浮かぶのだが、名からも住所職業からも全く何の印象も無く、とんと憶ひ出せない人も幾人かあり、女子のクラスになるとそれは一層多かつた。

此の名簿を見るのは、實は彼がそれを受け取つてからこれで三度目であつたが、印象の次第に鮮明になつて來る人たちの顏もしかし、のちに高等學校大學のころまで、學年が前後したりして附き合つた數人を除けば、皆、三十年の過去の沈澱したイメージの化石に過ぎなかつた。

ちよつと不思議なことに、女性の組の方が現住所も生死も不明な人が多い。牧野はそれが必

ずしも女の人たちの薄幸を意味するわけではあるまいと思つてゐるが、さういふ人は結婚したかどうかも亦不分明のやうで、舊のままの姓名のほかは空白になつてゐる。

「女子之部」と、いやに古風な書き方をしたアイウエオ順を彼は指で追つてゐたが、指は自然にまた後半の嶺冴子の名の上で留つた。

冴子の名の下もやはり空白の一行で、現在の消息は何も記されてない。

二

赤いこまかな模様のある白い布がふはりと彼の視界の端にあらはれた。

牧野は、疲れたかたちで前に伸ばしてゐた兩脚をひつこめた。

「すみません」

若い女の汗と體の匂ひが、かすかに匂つて來た。

彼は名簿を見てゐた眼を擧げた。

女子學生が、ハンカチと黄色い洗面具入れの袋とを持つて、彼の膝の前を通り、通路へ出て行つた。

娘はその小麥色の背を見せて狹い通路を向うへ歩いて行く。客車の通路は、牧野の位置からずつと見通しである。

やがて娘の姿が消え、通路の端のランプがともつた。手洗ひに鍵が掛つて「使用中」に變つた報らせだ。

牧野は自然に娘のからだの線を空想した。そして同時に彼は、娘の連れの自分に似た無口な若い大學生を意識した。

山が迫つて來、トンネルに入つた。たちまちすぐ明るくなり、また山があらはれ、山峽の白い道にトラックのとまつてゐるのが見え、踏切警報機の音が不意に近づいて來て急速に遠ざかつて行く。左手の川の幅が次第に廣くなり始め、列車は町をさして音を立てて走り下つてゐた。

ランプが消えるのを待つて、牧野も立ち上つた。用を足して、顏を洗つて髭を剃つておかうと思つた。——そしてあの娘を追つて、もう少し見たい氣があつた。

彼は、客車の端の洗面所の前でめざす娘に逢つた。何かスポーツをやつてゐるにちがひないと思はれるやうな、すみ〴〵のよく締まつた、しなやかな淺黑い均整のとれた體と、愛らしい首とを彼は認めた。

腋の見えるやうな大膽なポーズで櫛を持つた手をあげて、身づくろひをしかけてゐた娘はしかし、牧野のそれよりむしろ強くはつきりした眼ざしで、何か尋ねたいことがあるかのやうに、彼を正視した。

いまのさつき、娘のからだの形を想像してゐた彼は、

「？」

妙な氣がして、少しうろたへて視線をそらせたが、此の女子學生の胸にあるバッジと、連れの男學生のバックルと、牧野の勤めてゐる大學の名とは、どれもちがつてゐて、彼は講義のかけもちをした覺えもないから知られてゐるわけがないと思ふと、これはどういふことなのか分らなかつた。

牧野は手洗ひに入り、そして手洗ひから出ると、もう娘はゐなかつた。彼は、振動で大搖れに搖れる洗面場の水に顏を浸しこんで、煤煙と脂のよごれを石鹼でざぶ〳〵洗つた。

列車はその間に山を下り切つて、すでに操車場の構内に入つたらしい。

葡萄棚がどうなつたか、ダルマ燒酎の赤看板が白いスクーターの看板と變つてゐたかどうか、見るのを忘れたと牧野は思つた。

それから彼が席へ戻つて來ると、少し驚いたことに、あれだけ無口だつた二人の若者は、窓ぎはに向き合つて立ち上つて、双方から手を差しのべて握り合つてゐたのである。

牧野の影を認めると、二人はさつと腕を引いたが、それはしかしあまり情痴的な匂ひのしない、さつぱりとした愛撫の、といふよりただの握手の姿勢だつたやうに、牧野は見た。ただ彼の耳の底には、その前にどういふ言葉がついてゐたのか、娘の少しかん高い、

「ね」

といふ、單音に近い、確かめるやうな甘えるやうな聲だけが殘つた。

又、彼は羨望を感じた。

自分の鞄を取つて、出した物を入れ、チャックを締め、牧野はむつかしげな顔をしてさりげなく腰を下ろしたが、二人の若者も荷物を脇に、もうちやんと、いつでも下車出來る様子になつてゐた。

やがて白いプラットフォームの端があらはれ、フォームの屋根が列車の横にかぶさつて來て車内が暗くなり、驛名を告げるスピーカーの聲が聞えて來た。

十六年前、朝早く、牧野は特急車の寢臺の中でぐつすり眠つてゐて、自分の故郷の町の名を呼ぶスピーカーの聲でふと眼がさめ、あわてて身仕度をして、人氣の少い、電燈のついた此のフォームへ飛び出したことがあるのを記憶してゐる。

その時にもやはり、これが最後の歸省になるだらうと彼は考へてゐたやうだ。父母は健在で、束の間の文字通りの歸省であつたが、牧野は軍隊にゐて、そのあとすぐにも日本を離れる筈であつたのだ。

鐵道の驛のスピーカーが、到着する列車に驛名を告げる抑揚や、長く引つぱる引つぱり方は、五年前も七年前も十六年前も、いつも同じ人が呼んでゐるやうな感じを與へる。

しかし、あの日の早曉にマイクロフォンの前で驛名を呼んでゐた驛員は、今はどこか支線の驛の助役か何かに出世して、多分その十數年あとの若い男が、今放送室の中で、先輩の調子を受けついで驛の名を告げてゐるだけであらう。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com